

**Bosnia and Herzegovina**

ボスニア・ヘルツェゴビナ

首都：サラエボ  
通貨：兌換マルク(KM)  
人口：353.1万人(2013年国勢調査)  
公用語：ボスニア語、セルビア語、クロアチア語

1995年の Dayton 合意で紛争が終結。ボシュニャク、クロアチア系住民が中心の「ボスニア・ヘルツェゴビナ連邦」とセルビア系住民が中心の「スルブスカ共和国」の二つの主体からなる単一国家となった



**教育の分断を防ぎ 民族をつなげたい**

東ヨーロッパ、バルカン半島に位置するボスニア・ヘルツェゴビナ(以下、BiH)は、東西の文化が融合した国として知られている。ボシュニャク、クロアチア系、セルビア系の3民族が暮らし、首都のサラエボにはイスラム教のモスクをはじめ、カトリックの教会、セルビア正教会の教会が建ち並んでいる。

2018年2月、同国で保健体育の共通・コアカリキュラム(以下、CCC)が採択された。CCCとは、民族ごとに異なっていた教育課程を統合し、各教科の核(コア)となる要素を端的にまとめたものだ。コンサルタントのデヤン・バリッチ(以下、バリッチ)さんはCCC策定の背景を次のように語る。

「私たちの国では中央政府に教育省がなく、管轄の省は各地域に点在しています。その数は13に上り、それぞれ独自の学習指導要領を使って地域で多数を占める民族系の教育を進めてきました。ただ、こうした状況が続くと民族どうしが離れてしまうことから、カリキュラムを統一しようという声が高まりました」

そこで、BiHはCCC策定を主導する就学前・初等・中等教育庁(APOSO)を立ち上げ、各教科のCCC策定を行ってきた。そのひとつが保健体育のCCCだ。「生徒が体育の授業を通じて、運動技能の習得だけでなく、社会性や自覚性、寛容性、栄養・衛生習慣に関する知識を身につけられるような内容になっています」

そう話すのはAPOSOの責任者のマリヤ・ナレティリッチさん。これまでは自国と言語が近い国々と、言語が理解しやすい英語圏の国々の学習指導要領を参考にしてきたが、保健体育では言葉の壁を越えて日本に見習いたいことが多かったという。対象を幼稚園児から高校生まで一貫させた持続的な教育による能力開花にも期待を寄せる。

**保健体育で大切なのは 子どもが何を学ぶか**

現在、JICAは保健体育のCCCをもとに、より具体的な内容を盛り込んだ学習指導要領の作成

**スポーツ教育を通じた信頼醸成プロジェクト 生徒が自ら考え 進んで参加する授業に**

日本式の保健体育は遠く海を渡ったボスニア・ヘルツェゴビナでも採用されている。民族間の分け隔てなく、みんなで学び、みんなで楽しむ——学習指導要領の作成が進められている。

文●田中弾(編集部)



写真左はJICA専門家の辻康子さん。保健体育のCCC策定をサポートしつつ、密接な関係にある「モスタル市スポーツ協会の能力強化支援」を担当

JICA コンサルタント  
**デヤン・バリッチさん**(写真中央)

2008年、ボスニア・ヘルツェゴビナにおいてIT教育分野のCCCの策定を担当。その手腕を買われて2016年から「スポーツ教育を通じた信頼醸成プロジェクト」に従事する。「私は日本人の『社会の一員として貢献する』という姿勢が好きです。その考え方を自国に広められるのは素晴らしいことと感じています。写真はモスタル市の名所、平和の懸け橋である「スタリ・モスト」。紛争後に復興されユネスコ遺産に登録されている。



ジディッチさんの教え子は翌日の開校記念日を前にダンスを練習中。一緒に身体を動かして楽しみながら連帯感を体験していた



明日、縄跳びする? やりたいから

小学校体育教師  
**イヴァナ・ジディッチさん**

保健体育のCCC策定の有識者メンバーのひとり。「日本の研修では、子どもたちがグループになっておたがいの課題について教えあう姿に驚きました。学ぶ側が主体となった一体感を感じる授業でした。私は子どもたちが社会に出たあとつねに生き生きとしてほしいと願っています。それにはこうした体育教育が必要と学びました」

APOSO プロジェクトマネージャー  
**マリヤ・ナレティリッチさん**

「保健体育のCCC策定では、草案をまとめる段階でモスタル市を含む全国から体育関係者を招いてパネルディスカッションを行いました。健康的な生き方を実現するには社会性や寛容性を身につけることが大切——そんな方法論を新鮮に受け止めた人は多かったようです。教育現場が変わるよいきっかけになると感じています」



腕に抱えているのが保健体育のCCC。3民族3言語分が作成された



モスタル市スポーツ協会 シニア スポーツ マネージャー  
**ジェナン・シュタさん**

「クロアチア系とボシュニャクが住む二重行政下のモスタル市で、両民族のスポーツ交流やスルブスカ共和国の人たちとイベントを開催しています。スポーツ協会の立場から見ると、保健体育のCCCの運用には教育現場の理解が欠かせません。指導の新しいアイデアやトレンドを紹介する教員研修を行ってサポートしていくつもりです」

を進めている。BiHでは何かスポーツを行うとき、それがどんな種目であり、どんな動きをすれば効率的なのかということ、さらには細かいルールまで子どもにも覚えさせて実技に入る。これには体育の先生に「競技レベルを上げてアスリートを育てる」という強い意識があるからだ。

バリッチさんによると、各地域の教育省が参考にする旧ユーゴスラビアの学習指導要領には、実は「協調性」という言葉があったそうだが、肝心のそれを育てる方法の解説がなかったことから、いつしか忘れ去られたのだろうと推測する。

「体育の先生には『こうあるべき』という固定観念ではなく、『子どもが何を学ぶか』という教え方が必要です。先生たちのマインドを変えていきたい」と話す。

そのような中で新しい芽も始めている。小学校の体育教師を務めるイヴァナ・ジディッチさんはJICAの日本研修に参加して考え方が変わった。

「授業は児童全員が参加できるように工夫をすることで、一体感が生まれ楽しみながら学べることに気づきました。そこで、帰国後に授業で小グループを作り、児童全員に縄跳びをやってもらいましたが、得意でなかった子どももグループの一員であることが心地よかったです。一人のときに練習して上手になりました。今はその楽しい雰囲気が伝わって多くの子が縄跳びに興味をもっていきます。『先生、今度みんなの学年を集めて縄跳び大会やろうよ』とブームになっています」と微笑む。

ジディッチさんのような先生が増えればBiHの体育教育はきっと変わるはずだ。

「今年の9月からモスタル市内で新しい学習指導要領を試験的に実践します。導入校はクロアチア系の小学校2校、ボシュニャクの小学校2校と高校1校の予定です。先に策定した保健体育CCCをもとに学習指導要領を価値あるものに仕上げます」

バリッチさんは決意とともに、日本式の体育教育がモスタルから全国各地に広がることを夢見て努力を続けていく。

**子どもたちの好きなスポーツは?**

男子	女子
サッカー	ハンドボール
バスケットボール	バスケットボール
ハンドボール	サッカー